

「さざなみ軍記」覚え書——その成立をめぐって 高橋新太郎

井伏鱒二の当初の自論見からすれば、現行の『さざなみ軍記』は、未完の長篇小説とも言いうる作品である。続篇を書き継ぐことを予定してまとめられた作品だからである。

しかし、「続さざなみ軍記」は、一回書き継がれたのみで〔文学界〕昭13・10現在に至っている。また「著者自身の校訂を経て定本として刊行」を謳った最新の作品社版『さざなみ軍記』(昭55・4刊、羽石光志揮毫。井伏の自序と跋に安藤章太郎の序説を付す)の巻末に、初出誌一覧が掲げられているが誤記脱落があるので、訂正の意味をも含めて『さざなみ軍記』成立の書誌的経過をたどれば次の如くである。

逃げて行く記録【寿永二年七月十五日～二十八日】『文學』第六号、昭5・3(第一書房)※稿末に(未完)とある。新銳文學叢書『なつかしき塊実』(昭5・7、改造社刊)に収録。

逃亡記【同年八月十九日～二十日】『作品』一卷二号、昭5・6(作品社)※稿末に(未完)とある。

逃亡記その二【同年八月十九日夜～二十一日】『作品』一卷三号、昭5・7。

逃亡記(三)【同年八月二十一日午後～二十二日】『作品』一卷八号、昭5・7。

逃亡記(四)【同年八月二十九日～三月四日】『文學界』五卷一号、昭5・8(改編社)※稿末に(未完)とある。

早春日記【同年三月一日～四日】『文學界』五卷二号、昭13・2。

早春日記【同年一月十九日～二十七日】『文學界』五卷三号、昭13・6(改編社)※版画出版社『火木土ト小説二篇』(昭13・1、版画出版社)に収録。

早春日記【同年正月二十九日～二月四日】『文學界』五卷一号、昭13・1(文藝春秋社)。

早春日記【同年三月一日～四日】『文學界』五卷四号、昭13・4※稿末に(この項終り)とある。

以上をまとめて『さざなみ軍記』(昭13・4、河出書房)単行。更に「ジョン万次郎漂流記」を併録した小説集『さざなみ軍記』(昭16・1、河出書房)刊行。次いで新日本文学全集第十卷『井伏鱒二集』(昭17・9、改造社)に収録されて戦後に及び、現代文学選20 井伏鱒二篇『まげもの』(昭21・10、鎌倉文庫)『現代長編小説全集15』(昭25・6、春陽堂)創元文庫『集金旅行・さざなみ軍記』(昭26・10、創元社)『井伏鱒二作品集 第三卷』(昭28・6、創元社)現代日本文学全集41『井伏鱒二集』(昭28・12、筑摩書房)角川文庫『集金旅行・さざなみ軍記』(昭29・9、角川書店)名作歴史文学全集13『さざなみ軍記』(昭31・5、彩文書院)日本文学全集32『井伏鱒二集』(昭35・5、新潮社)昭和文学全集16『井伏鱒二』(新編 昭37・7、角川書店)『井伏鱒二集第一卷』(昭39・9、筑摩書房)現代の文学6『井伏鱒二集』(昭40・10、河出書房新社)現代文学大系43『井伏鱒二集』(昭41・3、筑摩書房)日本の文学53『井伏鱒二』(昭41・11、中央公論社)日本文学全集41『井伏鱒二集』(昭42・5、集英社)現代日本文学大系63『井伏鱒二・上林曉集』(昭45・8、筑摩書房)名作『歴史への視点』(昭43・8、学芸書林)新学社文庫『さざなみ軍記』(昭43・10、新学社)日本文学全集23『井伏鱒二』(昭44・4、河出書房新社)現代文学大系49『井伏鱒二集』(昭51・5、筑摩書房)等に収録されている。なお『作品』(昭5・6)に発表した「逃亡記」の初回の前書きの中で作者は「この前半を私は二回にわたつて他の二種の雑誌に発表したことがある。次に示すところのものは、その後半の一部分である」と記しており、井伏の記述に間違いがなければ、荒川有史^{注1}が指摘しているよう

以上をまとめて『さざなみ軍記』(昭13・4、河出書房)単行。更に「ジョン万次郎漂流記」を併録した小説集『さざなみ軍記』(昭16・1、河出書房)刊行。次いで新日本文学全集第十卷『井伏鱒二集』(昭17・9、改造社)に収録されて戦後に及び、現代文学選20 井伏鱒二篇『まげもの』(昭21・10、鎌倉文庫)『現代長編小説全集15』(昭25・6、春陽堂)創元文庫『集金旅行・さざなみ軍記』(昭26・10、創元社)『井伏鱒二作品集 第三卷』(昭28・6、創元社)現代日本文学全集41『井伏鱒二集』(昭28・12、筑摩書房)角川文庫『集金旅行・さざなみ軍記』(昭29・9、角川書店)名作歴史文学全集13『さざなみ軍記』(昭31・5、彩文書院)日本文学全集32『井伏鱒二集』(昭35・5、新潮社)昭和文学全集16『井伏鱒二』(新編 昭37・7、角川書店)『井伏鱒二集第一卷』(昭39・9、筑摩書房)現代の文学6『井伏鱒二集』(昭40・10、河出書房新社)現代文学大系43『井伏鱒二集』(昭41・3、筑摩書房)日本の文学53『井伏鱒二』(昭41・11、中央公論社)日本文学全集41『井伏鱒二集』(昭42・5、集英社)現代日本文学大系63『井伏鱒二・上林曉集』(昭45・8、筑摩書房)名作『歴史への視点』(昭43・8、学芸書林)新学社文庫『さざなみ軍記』(昭43・10、新学社)日本文学全集23『井伏鱒二』(昭44・4、河出書房新社)現代文学大系49『井伏鱒二集』(昭51・5、筑摩書房)等に収録されている。なお『作品』(昭5・6)に発表した「逃亡記」の初回の前書きの中で作者は「この前半を私は二回にわたつて他の二種の雑誌に発表したことがある。次に示すところのものは、その後半の一部分である」と記しており、井伏の記述に間違いがなければ、荒川有史^{注1}が指摘しているよう

昭6・8※稿末に(未完)とある。『年刊 小説 一九三二年版』(詩と詩論 別冊、昭7・1、厚生閣書店)に収録。

※前書きに統いて「この一稿は、この前の前の回数のその前にはいるべきものである」という但し書きがある。以上の「逃げて行く記録」「逃亡記」(一)～(四)【八月十六日～二十一日】をまとめて、文藝復興叢書『逃亡記』(昭9・4、改編社刊)に収録。

西海日記【同年九月二十四日～二十九日夜】『文藝』五卷六号、昭12・6(改編社)※版画出版社『火木土ト小説二篇』(昭13・1、版画出版社)に収録。

昭6・8※稿末に(未完)とある。『年刊 小説 一九三二年版』(詩と詩論 別冊、昭7・1、厚生閣書店)に収録。

「私が『陣痛時代』の同人のころは、世が不況で雑誌業界では左翼文學のほか無名のものの作品は殆ど愛付けてくれなかつた。私は謂はば氣無精のため左傾することが出来なかつたが、『陣痛時代』の同人は私を除くほか、みんな左傾したばかりでなく習作生活を止して左翼の寒軒運動に入つた。なかには入獄させられたきり消息を断つてしまつた人もゐる。就職口を見つけた人もある」（作品集『井伏鉢』）といつて言ふを井伏がたびたびもらしているところから、左傾・転向と撓動する時代思潮を背景としてこの作品を読みとろうとする傾向も生れてくるわけである。

西田勝「井伏鉢の知られざる一面」（『文學的立場』復刊三号、昭45・12）は、井伏が、森木義夫の主宰する無產階級文學雑誌『新文化』（一巻二号、昭3・4）に、ソヴェット政府が、無学一掃のため全国に配付した教育普及アッピール「子供たち」の翻訳を載せていることを報告している。西田の伝えるところによれば、井伏は『さざなみ軍記』に登場する、智勇兼ね備えた泉寺の覚舟の名はこの大學時代の級友森木義夫のペンネームから借りたものという。井伏が河盛好成との対談「井伏文学の周辺」で僕は左翼になれなかつたけれど、みんな友だちが同人雑誌やめて、全部左翼になつたでしよう。つまり『戦旗』に入っちゃつたんですね。僕一人とり残されたでしよう。その氣持を僕は最初あれに入れていたわけです。（中央公論社版『日本の文學』53巻、付録34、所収、昭41・11）とあるように、『さざなみ軍記』には、左傾する、時代の趨勢から身をはずした井伏の微妙な心緒がぬりこめられており、初出の『逃げて行く記録』や『逃亡記』なる題名にも、その孤独のかぎり、の反映を見ることができよう。

井伏は「苦渋あり」（『群像』昭24・4）なる小文で、「自分の或る種の欲望に対して、無関心を表す傾向」が、「代々、何百年も前から同じ場所に住みつけ、土に馴染みつづけて来た」小地主の末裔であることには根ざしており、たぶん自分の先祖たちは、「唯一の念願を凡人淨土」に置いていたと思われ、「世俗的な欲望は禁物であつたらう。……すべて目立つことはおきへる」血を自分も受けついでいるはずで、「一見、氣無精であるやうに見える」この性情は、「紙一重の差で、先祖たちと違つて私においてはするいのである。」と言い、「一面また私は、自画像を書くにあたつて、いはゆる『平面図』を書きたい衝氣も失つてゐない」とも記している。

井伏の文学には先祖の余徳のようなものがある、とは三好達治が説くところである。土俗的常民世界の営為の自然を独自のベースペクティブで活写する井伏のモラリスト的文学は、時代の奔流から身をはずす、さと肩接したしたたかな生活感覚と鋭敏な平衡感覚によって支えられていたともいえる。

井伏は「『さざなみ軍記』の史料——平家と自分に關すること」（『文學』昭28・2）で執筆の動機その他について語っている。平家の落人が身を隠した所として知られる九州の五箇庄に伝承された日記の話を友人の妹の学友を通して知り、それからヒントを得て書いた架空の「陣中日記」とのべている。この作品が、十年以上の時の経過の中で書き継がれしたことについては「私がこの作品に対して情熱がなかつたからではない。この小説の主人公——平家の或る公達が戦乱に際し周囲の荒涼たる有様によつて急速度に心が大人びてゆく姿を書き、有為転変の激しさを

現さうと思つたからである。しかし私の力量ではそれが現せないと思つたので、自分自身が少しでも鑑賞をつむのを利用して、戦乱で急激に大人びてゆく主人公の姿を出す計畫であつた」（新日本文學全集『井伏鉢』集『解説』昭17・9、改進社）と記しているように、自己の作家的成熟の証しを、主人公の成長の道程に刻印すべく十年の歳月をかけたのである。時の恩澤を受けた自然な形での成熟を狙つた文体上の試みの外に、『さざなみ軍記』には、井伏の別の狙いもあつたはずである。それは、日記というきわめて恣意的な形式を作品にとり入れた文学技法上の実験である。東郷克美が指摘しているように、「作品構成の労を要しない点で安易な方法であると同時に、フィクションな作畫世界の文学的リアリティを保証する効果をもつていて。」に違ひない。しかも、私は「その記録の一部」を現代語に訳してみると讀書されているように讀者を介在させることによって、断片的構成を自明なものとして讀者に印象づけ、作品の断続的な発表を自在なものとする。大越嘉七が説く如く「場面の移動（必ずしも展開でなく）は物語そのものの内的必然や作者の歴史把握の結果からではなく、ここでは作者の藝術的方法による心の世界（作品世界）の安定（流れ）を確保するための手段に過ぎない」のである。（『井伏鉢』の文学』昭55・9、法政大学出版局）

作品社版『さざなみ軍記』の自序には「この話は私の約十年間の氣持を、ところどころに貼りつけたアルバムのときものであつた。」と記されている。井伏にとってこの昭和二、三年前後からの十年間は、孤立と疎外の中、自己の立脚地を模索し文学的立場を確立していく時代であり、大越は「逃亡記」『さざなみ軍記』を支えていた敗者の現実認序といふものであると申された。

——最左翼の騎士は焚火を拂り、カラタチの煙のなかに走りこんだ。私たちが残忍に殺戮を行へば行ふほど、私たちには無力な民衆に反感をもたれ、私たちの部下は脱走できなくなる。しかし私は脱走したい。誰よりも先に味方から逃れて行きたい。（同 八月二十日夜）

中納吉盛の息子として仮定された若き侍大将の感懷の底には、身を寄せた作者の、やわらかな息づかいが秘められている。そこには「私は私たちの階級以外の人から厚意を示してもらひたい。」「私はいつもさう思ふが、私の一ぱん嬉しいことは、私たち一門以外の階級のものから好意を示されることである。」という述懐も記されている。

そしてまた、儀礼に通曉し、軍事・学問の達者で、戦陣の合い間に『寿永記』なる著述を企て、平家の亡ふべき行末を明視しつつ自らは「時勢とともに押しながされ自然の流れにしたがつて世をのがれるため」一門に加わっているかの如き泉寺の覚舟の、大悟した剛毅な姿は、時代に處する作者の描いた理想像でもある。長谷川鎧平のいう「敗北に處して矜持と平衡を失はぬ井伏的な優雅の精神の、端的な肉化」がそこにある。（昭和文學作家講 上、昭19・4、小学館）

井伏は、友人達の左傾の勧めに動じなかつた所以を、自らの「氣無精」に帰しているが、その一面には、微妙に屈折する心理を内包している。

識・基本的人間觀には、微妙な形で、プロレタリア文学の勃興とそれに続く退潮の反映、國家権力のファシショ化・軍国主義化の反映、総じて時代的混沌と『不安』の投影であると同時に、それらに対処する作者独自の文学精神の様相を読みとることができる。』と概括している。

佐藤嗣男が発掘した『井伏文等初期の相貌』(昭55・10『国際文学』)井伏の『散文藝術と誤れる近代性』(『福岡日日新聞』昭4・4・2~4)なる

文章は、生硬な行文で論旨は必ずしも明快ではないが、自己の扱る文学的立脚地を宣明しようとしたものである。「いかなる時代に於ても、あらゆる社会現象の上に変化の起らないといふことはない。人は生れ、且つ死んで行きさへする、そして、最も正しきもの、最も貧しき者のみが、常により多くの重荷を背負はされてゐる。」ように社会現象の変化に伴って必ず発生する「矛盾に対抗し反逆しようとする渾沌たる意欲」こそ近代性とよぶべきもので、「ビルディングやダンスホールや牢獄争議を題材として背景として作品を書くことによつて近代性を帯びたと信じてゐる人々」は「幼稚なる概念作家」にすぎない。「時代の先端に潜む矛盾に対し、経済学理論に照して批判を加えた点に於て、コンミニスト達は正しかつた」が、「彼等の仕事の結果は、今日までに幾人の頑強な闘士を出したかといふ計数に終始」し「勇士極まる文案のポスター」を生んだにすぎない。一方、これに対する「既成美学的新人達」は、「ビルディングとダンスホールとエロチズム!」を導入することで事足りりとしている。「ブルブルの闘争のうちに文学を堕落させ」てはならないというのが、その凡そである。『逃げて行く記録』『逃亡記』執筆前後の井伏の文学的志向が那邊にあつたかが知れよう。

この昭和四年は、井伏が新作家として文壇的に認められた年で、『都

では、この主人公の平家の公達を「門脇中納言教盛」の息子としていたが、『さざなみ軍記』に至つて「平中納言三位知盛」の息子「武藏守知章」に代えている。知章は『平家物語』卷第九に「知章最期」の模様が語られている。井伏ははじめ、「知章最期」の冒頭の「門脇中納言教盛卿の末子藏人大夫菜盛は、常陸國住人土屋五郎重行にくんどうたれ給ひぬ。」とある業盛を仮定して筆を進めたが、これを知章としたわけである。知盛・知章・監物太郎の主従三騎、波打際まで逃れたが、父を助ける。知盛・知章と侍の監物太郎は児玉党のために討ちとられ、知盛ただ一騎、馬を泳がせて宗盛の船にたどりつく様は卷第九に詳しい。井伏が『さざなみ軍記』を「知章」への鉢鉢の賦としたについては、愚かで哀れをさそう「三郎次」を身代わりに立て、息子をして「父は私たち一族のために、したがつて平家一門のために三郎次を犠牲にしたのだといふ。私はかういふ誤謬を憎む。そして父の勇敢でなかつたことは父のために氣の毒であつたと思ふ。」と記さしめるべき父親として、知盛がよりふさわしかつたからであり、一谷に最後を遂げた知章を甦らせたのである。井伏は未完に終つた「続さざなみ軍記」で、知章・覚舟を「生涯」に落ちのびさせ、そこに隱遁生活を築かせることを意図したが、戦争下の時勢が、作品の流れに符合する気配を好まず筆を置いたという趣旨のことをもらしている。この静謐な詩美を漂わせた知章鎮魂の賦にもその成立から、中絶未完に至る経緯に、意外な時代の相貌の影を見ることができる。

『清経入水』で知られる左中将が、作中で、伝聞をも交えて二度入水しているが、これも作者の鎮魂の深さのなせる業であろうか。なお、定本ともいうべき、作品社版の「跋」で、「鞆の津」などの地名や記述の

改変とそれに至る経緯が、懇切・詳細に述べられている。

注1 「『さざなみ軍記』論ノート——古典平家との対話を基底に」(『国立音楽大学研究紀要』第十二号、昭53・3)なお、荒川は、「逃げて行く記録」初出前書きの「文学少年?」なる記述が、「なつかしき現実」収録の際に「一年」に改められたことから、井伏の執筆態度の変化を言おうとしているがいかがなものか。『作品』発表の「逃亡記(四)」の前書きにも「文学少年」なる表現が見られ、そこに茶化しや軽侮のニュアンスを読みとることはできない。ただ執筆当初の井伏が、主人公を「文学少年」と仮定したことは注目されてよい。

2 「井伏鷗二と『さざなみ軍記』論」(記念論集『軍記物とその周辺』所収早稲田大学出版部 昭44・3)日本文学研究資料叢書『井伏鷗二・深沢七郎』(有精堂 昭52・11)に再録。

3 「日本近代文学大事典」(講談社刊)の「森本巖夫」と「森本覺舟」の記述からは、生年月日・出身地・学歴等からして同一人とすることには無理がある。『新文化』主宰の「森本巖夫は、二松堂版の『文藝年鑑』を見ると、小学校卒業後、英語及び独逸語専門の学校に学んだとあるが、井伏の大学時代の教友たり得たことがあるかどうか。宇都出身で早大露文を中退し音楽評論を手がけた、「森本覺舟」の俗名が「巖夫」である可能性もあり。井伏に記憶の錯綜があるかも知れない。井伏も寄稿した「不協調」誌上で文藝評論の森本巖夫と音楽評論の森本覺舟が、蹤を接するように前後して執筆している。

(学習院高等科教諭)

新聞』が七月に企画した〈新作家訪問〉なる連載記事で、中村正常・逸見広・中本たか子・明石鉄也・舟橋聖一らと並び井伏も紹介されている。「こだはり過ぎて蝸牛の如く……」(講士にはなれぬ井伏鷗二君)の公達に依託した時代の苦難を凌ぐ作者の、「流亡日記」といった自論見がくわされているようと思う。遠い歴史の風景の中に、現代の風懷をこめる骨法は、例えば、前半(七月十八日・八月十七日・八月十九日)に多出する「階級」「変態的階級」などの時代的流行語の意識的用法に典型的にあらわれている。

井伏の世界には、処女作以来、時の流れによって疎外され、取引残されたゆくものへの親炙が見られる。この『さざなみ軍記』にも若き平家の公達に依託した時代の苦難を凌ぐ作者の、「流亡日記」といった自論見がくわされているようと思う。遠い歴史の風景の中に、現代の風懷をこめる骨法は、例えば、前半(七月十八日・八月十七日・八月十九日)に多出する「階級」「変態的階級」などの時代的流行語の意識的用法に見がくわされているようと思う。遠い歴史の風景の中に、現代の風懷をこめる骨法は、例えば、前半(七月十八日・八月十七日・八月十九日)に多出する「階級」「変態的階級」などの時代的流行語の意識的用法に見がくわされているようと思う。遠い歴史の風景の中に、現代の風懷を